
僕と彼女と…

みゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼女と…

【Nコード】

N9258C

【作者名】

みゆ

【あらすじ】

彼女に子供が出来たと聞かされ…。

「赤ちゃん、できたみたい…。」

遥香の突然の告白に、ただ呆然とする俺。

それって…、俺の子だよな。

見に覚えは…、あります。

でも、いきなりそんな事言われても…！

混乱。

「なんか言ってよ。」

遥香の声。

なんかって言われても、なんて言ったらいいのか。
…。

「そう…。」

「そう、て…。他に何かないの？」

他にって言われても、何て言ったらいいの？

「子供が出来たら一緒に育てようって、言ってくれてたじゃない。」

はい、確かに言いました。

でもあれは、その場の流れで言ったというか…。でもそれは、今言える雰囲気じゃない。

言葉を探す事、数分。

「もういい。」

何も言わない俺に業を煮やしたのか、遥香が立ち上がる。

「あ、遥香…。」

呼び止めてはみたものの、何を言っているのかわからない。

遥香は、俺を涙目で睨み付け、部屋を出ていった。

会社に入社して一年目。23歳の俺。入りたい会社に入社出来て凄く嬉しくて、仕事が楽しくて仕方ない今日この頃。

一方では、大学時代の友人と飲みに行ったり、たまには合コンなんか行きたいと思う、まだまだ遊びたい盛り。

それが急に『子供が出来た』なんて言われて。どうしたらいいんだ?!

確かに遥香のことは好きだし、これからずっと一緒にいたいって思う。

でも、いきなり『子供が出来た』なんて言われても…!父親になるなんて考えたこともなかった。

遥香だって、仕事始めたばかりなのに。子供産みたいって、思ってるのか…?

携帯が鳴る。

誰だよ?こんな時に。

面倒くさく思いつつも、通話ボタンを押す。

「:はい。」

「中村恭吾!!」

いきなりフルネームで怒鳴りつけられる。俺をフルネームで呼ぶ奴はただ1人。遥香の親友の原田まゆみだ。

「なんだよ」

「遥香に『子供産んでほしくない』って言ったんだって?!」

「そんなこと言ってねーよ!」

なんでそんな話になってるんだ?!俺何も言ってないのに。ふと冷静になる。

そういえば遥香、俺のアパートから出ていった後、何処に行ったんだ?

「遥香、おまえの家にいるの?」

「いるよ。寝てる。」

ちょっと安心。

「産むなどは言っていないっていうけど、じゃあ、なんて言ったわけ？」

こっちの感情おかまいなしに、さらに責め立てられ、ちょっとイラつきながら答える。

「何も。」

「何も?!」

いちいち大きな声出すなよ。

「遥香の事、好きじゃないの?」

…好きだけど。

「遥香1人で産むって言ってるんだよ?」

「はあ?!」

今度は俺が大きな声を出す。

なんだよそれ? 何でそんな話になってるの?

「ねえ、それでいいの?」

いいわけないだろ!

いいわけ、ないけど…。

「ちょっとは遥香の事も考えてあげてよ。」

……。

「ごめん。ちょっと1人で考えたいから。」

そういつて電話を切った。

「遥香の事頼むな」それだけ付け足して。

遥香、子供産みたいって思ってるんだ…。

そういえば昔、『子供が出来たら、いっぱい幸せにしてあげるんだ』なんて、言ってたことあったっけ。

あの時はそんなこと言う遥香がかわいくて、『じゃあ、子供が出来たら一緒に育てよう』って言ったけど、それが現実になると…。

正直言って、責任とかまだわからないし、親になる自覚なんて全然ない。

…いきなり子供とか言われても…。

…。

…。

もう考えるのやめた！今日は寝てしまおう！

あれから何度か遥香に電話したけど、全然電話に出てくれない。もし出たとしても、なんて言ったらいいのかわからないけど。

数日後。

仕事が終わわり、会社の先輩の白井さんに誘われ、白井さんの行き付けのスナックに行った。

少し酔いはじめて、これからどんどん飲むぞ！というところで、白井さんの携帯が鳴った。

どうやら家かららしい。

電話を切った白井さんは、帰り支度を始めた。

「悪い。子供が待ってるから、今日は帰るわ。」

謝りながらも白井さんは少し嬉しそうだ。

「子供、かわいいですか？」

思わず聞くと、

「マジかわいいよ、うちの子。今度写真見せてやるよ。」
見事な親馬鹿ぶりを披露された。

白井さんを見送り、1人で酒を飲む。
…。

俺は白井さんみたいにな、子供がかわいいとは思えない。
近所のガキは憎たらしいし、たまに見かける赤ん坊も、泣いてばかりでうるさいだけだ。

「どうしたの？悩み事？」

ため息をつく俺を見て、ママが話し掛けてきた。

「はあ、ちょっと…。」

「当ててあげましょうか。そうねえ…、彼女に子供が出来た、とか。」

びっくりしてママの顔を見る。

何でわかったんだ？！俺まだ誰にも言っていないのに。

「当たった？さっき白井くんの子供かわいいか聞いてたから、そう
だと思ったの。」

女のカン（それとも客商売のカンか？）はすごい…。

「それで、結婚するの？」

「まだ決めてないです…。」

「中村くんだけ？今いくつ？」

「23です。」

「そっかあ。じゃあまだ遊びたいわよね。」

「遊びたいっつーか…。」

ママの言葉に、口を濁す。

「彼女とは、どれくらいつきあってるの？」

俺は、遥香と3年つきあってることを伝え、大学で初めて会ったときのことから、付き合い出したきっかけ、そして今日までのことを、ママに聞かれるまま話した。

話しているうちに、遥香という楽しかったこと、喧嘩もするけど、二人でいて幸せだったんだってことを思い出す。

「それで彼女は、1人で子供産むって言ってるんだ。実家にも帰

るつもりなのかしらね。」

「いや、多分それはいいです。あいつ母親死んじゃっていいし、父親も、あいつが高校の時再婚したらいいから。」

「じゃあ、本当に1人で育てようと思ってるの？ものすごい大変よ。」

「そうだな。」

自分が働かなくちゃ金もないし、その上1人で子供の面倒見て、頼れる人もいなくて…。

「中村くんは、それでいいの？」

「良くないけど…、父親になる自覚とか、責任とか、わからなくて…。」

深いため息をつき、酒を飲む。

「彼女の事好きなんですよ？一緒にいたいって思うんですよ？」

「…はい」

「なら、幸せにしてあげなさいよ。」

…。

遥香にとって何が幸せなのか。今まであまり考えたことがなかった。とにかく今が楽しければいいと思ってた。

遥香を幸せにできる方法なんてわからない。でも…。

「幸せに…できるかな。」

「大丈夫よ。責任とかそんなの考えなくても、一緒にいたいって気持ちがあれば。」

ママの優しく、そして力強い言葉。

「親の自覚もね、女は子供を身籠った時から徐々にでてくるけど、男は身籠らないから。最初はなくても当たり前よ。そのうち出てくるわよ。」

「そうですかねえ…。」

「そうよ。白井くんだって、最初は全然自覚なんてなかったけど、今じゃ子供にデレデレなんだから。」

「そうなんですか？」

意外。白井さんは、最初から子供が好きだったんだと思ってた。

「それより、彼女のこと、何とかしないと。今はまだ悩んでいるところだと思うけど、はやくしないと取り返しのつかないことになるわよ。一度決心してしまったら女は怖いわよ。」

「…はい。」

「正直に自分の気持ちを言えれば、彼女もきっとわかってくれるわよ。」

「そう、ですよね。」

「そうよ！じゃあ、そうと決まったら、今すぐ彼女のところに行きなさい！」

「はい。ありがとうございました。」

ママに背中を押されて、遥香のアパートへと向かう。誰かに言われないと動けないなんて、本当に情けない。

こんな情けない俺でも、遥香は許してくれるだろうか。

遥香のアパートに着き、窓明かりで起きていることを確認する。玄関のチャイムを鳴らし、待つこと数十秒。

「誰？」

ドアが少しだけ開き、中から遥香の声が聞こえた。

「俺。」

「…恭？」

「うん。」

その瞬間、ドアを閉める遥香。

「ちよっ、遥香？なんで閉めるんだよ?!」

ドアを叩く俺。

携帯が鳴る。遥香だ。

「もしもし、遥香?!」

「…何しに来たの。」

「何しにって、遥香とちゃんと話したくて。」

「話すことなんてない。」

低く冷たい声。こんな声を出す遥香は初めてだ。

少したじろぐけど、ここで負けるわけにはいかない。

「遥香に無くて、俺にはあるんだ。聞いてくれるだけでもいいから。」

無言。

「どうしても聞いてほしいことがあるんだ。遥香、お願いだから。」

「…じゃあ、このまま電話で話して。」

「電話じゃ嫌だ。直接顔をみて話したい。」

再び無言。

「遥香、お願いだから、ドア開けてよ！」

電話で話しながらドアを叩く。

どれくらいそうしてたのか、いきなりドアが開く。

「近所迷惑でしょ。」

それだけ言って部屋に戻る遥香。ドアは開けたまままだ。

「入っていいの？」

背中を向けたまま、何も言わない。

「入るよ。」

そう告げて、玄関に入りドアを閉める。

「遥香、こっち向いてよ。」

呼び掛けても背中を向けたまま動かない。仕方なく、そのまま話し始める。

「俺、子供が出来たって聞いて、正直頭真っ白になっちゃって。だってまだ23だし、会社入ったばかりだし。どうすればいいんだって、ずっとそればかり考えてた。」

遥香は何も言わない。聞いているのか、聞いてないのかわからない。けど、とりあえず続ける。

「でも原田に、遥香が1人で子供産むって聞いて、すげえ嫌だった。遥香が俺の前からいなくなるなんて考えられなくて。子供とか関係

なく、遥香とずっと一緒にいたい。」

「…それって、子供は嫌ってこと？」

遥香がようやく口を開く。

「私は、絶対に子供堕ろしたくない！だって、もうここにいるんだよ？」

お腹を大事そうに触る。

「だから、1人で育てるって…」

「嫌とかじゃない！」

遥香の言葉を遮る。

「嫌とかじゃなくって、自信がないんだ…。はっきり言って、父親になるって言われても、ピンとこないし。」

「自信なんて、私だってないよ！」
声を荒げる遥香。

「小さい頃お母さん死んじゃって、母親の記憶もロクにないのに…。そんな私が母親になれるのか、どうやって育てたらいいのか…不安でしょうがないよ！」

遥香も悩んでたんだ。そうだな。遥香だって、急に子供出来てどうすればいいのかわからないよな。

「ごめん、遥香。」

遥香に近づく。

「色々悩ませてごめん。」

遥香はまだ、背中を向けたまま振り向かない。

「俺、超頼りないと思うけど、それでも良かったら、一緒に子供育てないか？」

「…ほんと？」

小さな声で、遥香が聞く。

「本当だよ。」

俺は後ろから遥香を抱き締めた。

「…恭、お酒臭い。」

「え？」

「お酒臭くて気持ち悪い…。」

俺をはねのけ、洗面所に飛び込む遥香。

せつかくいい雰囲気になったのに、そりゃないだろ。そして、ふと
気付く。これってよく聞く“つわり”？

「大丈夫か？遥香。」

背中をさすってあげようと近づくと、

「寄らないで！」

拒否。

仕方なく、少し離れた場所で遥香が落ち着くのを待つ。

ようやく落ち着いた遥香が、俺から離れたまま言ったことは、

「酔っぱらいが言うことなんて、信じられない。」

：確かに、酔った勢いでここに来たことは否めない。でも、今言っ
たことは本気なのに！なんか立場ないじゃん、俺。

「わかったよ！じゃあ明日仕事終わった後、しらふでもう一回言っ
てやるよ！絶対に居留守使うなよ！」

軽くキレ気味で玄関に向かい、ドアを開けたところで振り返り遥香
を見る。

「おとなしく寝ろよ！」

遥香が少し笑ったような気がした。

定時で仕事をあがり、遥香のアパートへと向かった。

昨日とは違い、すんなり俺を部屋に入れた遥香は、なぜか正座で俺
と向き合う。俺もつられて正座。

なんだ？この雰囲気。なんか落ち着かないんですけど…。

そわそわしている俺を、期待したような目でじっと見つめる遥香。

きっと俺が何か言うまで、このままなんだろうな…。言うことは昨
日と変わりませんが、いいでしょうか？ドキドキしながら口を開く。

「あの…、昨日も言ったけど、子供一緒に育てない？」

なんで疑問形？昨日と同じこと言ってるはずなのに、なんか情けないというか…。

遥香は…、反応なし。

あれ？やっぱり言い方が悪かった？

「あの…、遥香？」

「それ、昨日聞いた。」

いや、だって、『しらふでもう一回言う』って、昨日言ったよね？俺。

「恭が、子供一緒に育ててくれるっていうのはわかった。それはすごく嬉しいよ。でもそれだけじゃなくて、他に言うことない？」

他に…って、何？

「だから、一緒に子供育てるってことは、つまり、私と恭がこれからどうするってことなの？」

言い方が回りくどくて、よくわかんないんですけど…。

一緒に子供育てるってことは、一緒に住むってことだろ。あ、その前に親に挨拶とかしなきゃいけないよな。そういえば、挨拶ってなんて言えばいいんだ？『子供出来ました』じゃ、まずいよな。やっぱり『娘さんを僕にください』とか言うのかな？いや、ストレートに『結婚させてください』でいいのか？

あ！

そこまで考えてやっと気付く。そうか！『結婚』だ！俺、『子供育てよう』とは言ったけど、まだ『結婚しよう』って言ってない。

遥香が聞きたがっているのは“プロポーズ”の言葉だ！

遥香は俺がわかったことを察したのか、さっき以上に期待した目で俺を見る。

ヤバイ。そんなの考えてなかった。プロポーズってどうやってするんだ？よくテレビで見るのは、夜景の見える場所で指輪を渡しながらってというパターンだけど、指輪なんて用意してないよ。つか、プロポーズなんて、照れ臭くて…。

「言わなくてもわかるだろ。」

俺の言葉に

「嫌！一生に一度のことなんだから、ちゃんとってと、ちよつと膨れながらせがむ遥香。」

「ちゃんとやってくれないと、結婚しない。」

さすがにそれはないだろうけど、そこまで言われたら言わない訳にはいかないよな。

「わかった。じゃあ、30分待って。」

「え、なんで？」

「いいから！」

財布を持って外に走る。指輪とまではいかないけど（というか、そんなに金持っていないし）、手ぶらじゃ気が引ける。

迷いに迷って買ったのは、遥香の好きなガーベラの花束と、遥香がよく買うコンビニのゼリー。これが今の俺の財布から出せる精一杯。ダッシュで遥香のアパートに戻りドアを開ける。遥香が振り向くのと同時に花束を渡して、そのまま勢いで言った。

「遥香、結婚しよう」

「うん！」

俺に抱きつく遥香。

すごく恥ずかしいけど、遥香が喜んでるから、いいか。

「あのさ、指輪はまた今度でもいい？」

「うん、わかってるよ。だって恭が私の指輪のサイズ、知ってると思っけないもん。」

言葉は少し意地悪だけど、嬉しそうに俺に抱きついている遥香は、物凄くかわいかった。

何が出来るかわからないけど、頑張ろう！心からそう思った。

遥香の笑顔と、そして、これから生まれてくる、新しい笑顔の為に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9258c/>

僕と彼女と…

2010年11月28日05時55分発行